

第6課「信仰を詳述する」

*自分自身の信仰を振り返り、詳しく吟味してみよう。決して完全ではない信仰である事に気づく。信仰が不完全なままで救いを得ることができるのだろうかと考えてしまう。しかし、いくら考えても自分の信仰では救いが得られない事は確かであるという事が明らかにされてゆく。では、どうして救われてゆくのだろうか？その答えは、ただイエスの信仰に寄り頼む事であるという事だ。アダムの犯した罪は、この世界に死とそれにともなう苦難や災いをもたらしてしまった。イエスは人性をとられ、改めてアダムの歩むべき道を歩んで下さり（罪の影響を受けている事を考えるとアダムより過酷）、罪を贖うための身代わりの死と、罪人が出来ない善い人生を代わりに生きる事により信仰による義認、赦し、聖化の恵みによる成長、再臨直前の栄化と回復の希望を約束して下さった。気体

1. 信仰による義認への希望

- ・ **義認のもたらすもの**：信仰による義認は、イエスによる神と人との平和（和解）をもたらす。それは私たちにとって大きな希望である。「希望」に至るまでの道のりとして、「苦難」「忍耐」「練達」が示されている（ローマ5:1~5）。
- ・ **希望への道**：①苦難：罪の結果であり、必然的であるが、神は万事を益として下さり、苦難を試練に変えられる。②忍耐：「救い」という目的に向かってゆく為に、希望に向かって前進する（希望を失ってはいけない）人々の心に養われてゆくもの。③練達：「熟練して深く通じてゆく事」（大辞泉より）で、更に深い神に対する確信（愛、恵み、憐れみ）に基づき、希望を持ち続けることによって品性が養われてゆく。それらの背後に聖霊似よる導きと、私たちに対する深い愛が注がれている。厳しい訓練を乗り越えたアスリートが勝利を得る事に似ている（義の訓練は全てのチャレンジャーに善い結果を与えてくれる）。
- ・ **イエスの身代わり**：イエスの身代わりは罪に対してのみでなく（罪とその結果に対する身代わりの死）、善き行いも私たちに代わって全うして下さった（完全なる人生の身代わりの生）。
- ・ **私を求め続ける神**：人類が罪を犯したその瞬間から神は罪人を求め探しておられる（創世2:8~9）。神は私たちに深く愛しておられる（アガペ）。それは、取り返しのつかない罪によって虚しくされ、弱くなってしまった私たち罪人に対する慈しみである。そんな不信心で罪深い私たちに命がけで愛して下さる。それは、善い者になったら愛するのではなく、罪人であるがまま受け入れあいして下さっている。「帰っておいで」「心配するな」と招いている。神は愛そのものである（ローマ5:6~8）。その愛は、怒りが生じるほどに強く深い（ローマ5:9）。神は罪に苦しみ、哀れな状態の私たちをご覧になられ、悔しくて仕方がないのである。
- ・ **敵を愛する**：人に対する深い愛は、まさにイエスが私たちに教えて下さった「あなたの敵を愛しなさい」（ルカ6:27~36）の実践であり、人が罪を犯した瞬間それは示された。罪人の為に命をかけ、その命を身代わりとなって捨てる事をいとわないイエスこそが私たちの誇りであり、イエスを通して神を誇りとする事ができる（ローマ5:10~11）。神との関係の回復の為の和解を、私と神の間に立ってイエスが仲保者となって下さる。

2. 第2のアダムの必要

- ・ **死の解決**：私たちのDNAには「永遠に生きる」という情報が組み込まれているのだろう。だから、どんなに時がたっても、何度も何度も死を目撃しても、「死」への恐れは取り除かれないのだろう。そこには求めているがなし得ない矛盾にジレンマする。人祖アダムとエバの犯した罪の結果、人類は罪に対して無力化されてしまった。私たちは自らの力ではどうすることもできない現実を生きている（ローマ5:12）。だからといって、全ての責任をアダムに押しつけてしまうことはできない。確かに彼が犯した罪によってこの世が罪の世となった事は事実だろうが、私が犯した罪は、私自身の責任でもある。この問題を他人に押しつけて逃げる事は出来ない。しかし、力が無い。故にイエスの贖い、身代わりの死（責任を肩代りする）の必要を知り求める。
- ・ **律法に照らし合わせ**：律法は罪の自覚を呼び起こし、気づきを与える役割を持つ。律法がモーセに示されるまで、罪の問題は与えられた光（罪を自覚する力は今よりもすぐれていたのではないだろうか）に従って自覚されていた。律法によって罪は明確にされた。明確にされただけ神の恵みがある上に置かれる。限りなく存在する罪に対して、限りない神の恵み（贖い、救い）が無限に備えられている（ローマ5:20~21）。そして、最終的に神の愛が勝利する。
- ・ **第2のアダム**：第2のアダムとは、イエス・キリストである（ローマ5:18~19）。イエスは罪を贖う事により、救いが全てのアダムの子孫と地上の生物に及ぶようにして下さった。本来アダムがなすべき事を示し（神に対する忠実。善を行なう。愛に基づく。神との正しい関係の保持など）、それを行なって下さった。これは人類に対する模範であり、神と共に生きる事を選ぶ罪人に与えられた可能性を示した。義認を確立されたのは、実にイエスの命による贖い（十字架）である。アダムは罪を招き入れた。イエスは罪を贖った。アダムは死の定めを受けた。イエスは永遠の命の回復をしてくれた。アダムは有罪（死刑）となった。イエスは自らの命を代わりとし罪人の命を救われた（義認、無罪）。アダムは罪人となった。イエスは私たちに義人として下さる。アダムは罪の影響の無いところから（完全な心と身体）の誘惑だった。しかし、イエスは罪人と同じ状態（不完全）で誘惑から勝利し贖いの働きをされた。これはまさにマイナス（どん底）からの出発だった。私たちはイエス・キリストによって救われたのである。